ベシ・ベカラズ・マシジ・マジについて

大野透

ベカラズは、平安院政期の純国文風の作品には殆ど現れず、訓読調の著しい作品には少くないことは明かな事実であるが、未だ指摘されてゐない様である。この語のかゝる用例の偏在は訓点語であることに原因すると一往説明し得ようが、何故自然発生しなかったかといふ疑問が次に起るはずである。其は、ベカラズの発生を妨げるもの、即ち等価語の存在によってのみ説明し得る。等価語とは、単なる同義語ではなく、形の上でもベカラズと同じくベシの否定語でなければならない。単なる同義語では、自然な造語と思はれるベカラズ（ベクアラズ）の発生を妨げることは出来ないはずである。(1) かゝる語を一体見出し得るであらうか。其はマジの古形マシジの外にはあり得ない。依ってマシジがベシの否定語であるばかりでなく、否定形でもあることを証せねばならない。其にはベシ等の意義用法を検討する必要がある。引用文献を次の略号で引用する。

A　山田孝雄、日本文法論　明治四十一年

B　橋本進吉、「がてぬ」「がてまし」考　明治四十三年（「上代語の研究」所載）

C　橋本進吉、万葉時代の「まじ」　昭和二十六年（「上代語の研究」所載。「万葉時代に於ける『まじ』と『ましじ』」（大正九年）の訂正）

ベシ等の意義用法は甚だ常識的と見えようが、必ずしもさうでないと思ふ。次に明解古語辞典の説明を引用する（用例等は大部分略す）。「べし」……㈠ある事が起りそうに思われる意を表わす語。…シソウダ。㈡現在の事態に対する推量の意を表わす。…ラシイ。…ダロウ。㈢単に未来を表わす。…スル予定ダ。…スルコトニナッテイル。㈣（多くは否定の形で用い）それが許されている、の意。…シテモヨイ。㈤理論的にそれが当然だ、の意。…スルハズダ。…スルニチガイナイ。㈥それをすることが必要である意を表す。…シナケレバナラナイ。㈦（常に終止形を用い）命令の意を表わす。…セヨ。㈧可能と推量を兼ねた意を表わす。…コトガデキソウダ。…コトガデキョウ。㈨（常に終止形を用い）意志を表わす。…ショウ。「まじ」……㈠…シソウニナイ。㈡否定の形に推量する意を表す。…マイ。㈢…シテハナラナイ。㈣否定の形の意志を表わす。…マイ。㈤…スルコトガデキソウニナイ。「ましじ」……「まじ」の古形。…マイ。「さゞずばつひにありかつー・じ（＝堪エラレナイダロウ）」（万）。以上の如くであるが、これでは各語の根本概念は明かでなく、用法分化の経路も知り難

い。例へば、続紀宣命58「朕波汝乃志乎波暫久乃間毛忘得末之自奚奈毛悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川川大坐麻須」のマシジは未だ問題にされたことはないが、現代語のマイと異ることを示す適例である。どうしても忘れることの出来ない現在の状態を表す為に用ゐられ否定推量と解する事の非を明示する。以下順序としてベシの説明より始めるが、紙面の都合で略説程度に終るのは已むを得ない。

一　ベシの根本概念と語原

先づ先人の説を引用する。あゆひ抄には「其いきほひをしるに、かくありてよきほと也とはかりさためていふ詞也。里に〈ころあひ〉なといふほとの心也。まさしくあてんには心えて〈ねばならぬ〉といひ〈はず〉といひ〈そな〉といふ又〈ことがなる〉なとの里言。たかひにえたる所あり。……」A（四五一ページ）には「推理的に事実を胸中に描写するなり。而してそは道理上、必然あるべき事、又然あるを正当とすること前後の関係上当然又は必然の事にして動かすべからざる根拠を有して成立てる推定をあらはす。かゝれば、主観的に自己の推定の根柢は動かすべからずと確認したるさまみゆるなり。……又理の当然たるを述べて第二者に対して間接に勧誘し、是非ともその状態を引き起すべき地位に立たざるべからざるを示す。」とある。これらで一往ベシの根本概念は説明され、他のいはゆる推量助動詞と異り、当為等を表し得る所以が了解される（推定の場合でもムよりは強く、ラシイ・ダラウと訳すのは適当でない）。古今集仮名序「さざれ石のいはほとなる喜びのみぞあるべき」は、真名序「砂長為巌之頌洋々満耳」に対応し、当然の事実として断定したものである。これを推量とするのは不当で、推定とするのも不充分である。推理的肯定とすべきである。ベシは事実を単に事実と推定するのでなく、或る事実、陳述には相当の原由があると推理的に肯定する時にのみ使はれる。故に推理的肯定の助動詞と名づくべきで、推量の助動詞の名の下に、必ずしも適当しない幾つかの助動詞を一括する便宜的方法は避くべきかと思ふ。

ベシの語原を考へるに、これと関係あるベラナリに於て、ラは接尾語、ナリは助動詞であり、又ク活用の単語は活用部を除いた部分が語根をなすのが一般である事から、「ベ」が何かの意味を表してゐたかと考へられるが、適当とは思へない。然しウベのウの脱落した形と見れば解決する事と思ふ（ウベ・ベシのベは共に特殊仮名の乙類）。ウベは或る事実、陳述に相当の原因があることを肯定する（ウベナフ）言葉で、ベシの根本概念に完全に相当する。陳述の後にウベナリ、ウベナリケリが使はれることはあるが、「…ヲナスウベ」といふ用例はない。然しかゝる用法はあって然るべきものである。これは「…ヲナスベ」となり易いが、更に「…ヲナシベシ」の形が生ずるのは自然の事と思はれる。「…ゴト」が「ゴトシ」となる様に。

以上で一往ベシとウベの関係を示し得たと思ふ。「ソハ犬ナルベシ」の場合、推理的に事実たる事を肯定（断定乃至推定）してゐるが、犬なる事実に原由ありと肯ふのではなく、犬なりといふ陳述に根拠ありと肯ふウベの働より、かゝるベシの用法が生じたと見得る。これに類する場合の外は、事実の原由と陳述の原由とを峻別する要はなく、ウベの用法からベシのそれを容易に説明し得る。無名抄「かくも取りなしてんとべしげによめる」のベシゲ

はウベウベシゲに等しく、ベシとウベの関係を明示する。蜻蛉日記に五例見えるウベモナクはあるべからざること、あるまじきことと、憤懣を表す言葉である。因に、見ベシ等の形は従来より自然に説明し得ると思はれる。

二　ベシの用法

三類に大別される。

(A)　当然・必然・断定・推定・可能を表す

原義に基くもので説明の要はない。個々の場合に用法を細別するのは適当でないが、三類に分けて用例を挙げる。

○当然・必然。万葉集巻一・七五「衣応借」同巻三・三三八「可飲有良師」同巻十九・四一六五「立倍之」続紀宣命一一「可治仮」同一六「正賜倍仮」竹取物語「子に成り給ふべき人なめり」「仕ふまつるべき人々」

○断定・推定。允恭記「斯理奴倍志」允恭紀「資利奴陪瀰」万葉巻九・一七四九「可開継」「今西応有」同巻廿・四四〇八「安流倍之」土佐日記「さかしきもなかるべし」「風も吹きぬべし」

○可能。万葉巻八・一五二二「投越都倍仮」同一五二五「見毛可波之都倍久」古今巻一「香をたづねてぞ知るべかりける」同巻二「とどむべきものとはなしに」

全てウベと肯定し得る事に用ゐられる（勿論或る程度誇張される事はある）。A（九四六ページ）が、推量・可能・適当の順で発生したとするのは疑はしい。

(B)　慫慂・命令を表す（転義）

当然の事として他人の意志を決定しようとするものである。為スベキコトナリ等の場合は間接的であるが、為スベシの場合は多く直接的となってゐる（然し概ね他の表現法で表される）。万葉巻二・一二八「勤多扶倍思」同巻廿・四四六七「刀具倍之」続紀宣命三「治可賜」栄華物語「七日の夜せさせ給ふべし」

(C)　決意を表す（転義）

当然の事、やむを得ざる事として決意するわけである。他の表現法で表される事が多いので用例は多くない。上代に於て確かな例はないが一往挙げておく。万葉巻十一・二六六三「可越」続紀宣命一〇「不忘不失可有仮」竹取物語「宮づかへに出したてなば死ぬべし」

竹取物語「今こがね五十両賜はるべし」は話手の意志と共に相手への誘へを表す。(2)

三　マシジの意義用法

マシジと読まるべき例は、BとCとによれば十六例あり、続紀宣命三及び五の「不改」はベカラヌと訓むかマシジキと訓むか不明とされ、万葉巻六・一〇五三及び一〇五五の「不可易」は従来カハルベカラヌと訓ぜられてゐるが、寧ろカハルマシジキと訓む方が正しいのではあるまいかとある。以下この十六例によりマシジがベシの否定語、即ち推理的否定の助動詞なることを確める。

既出の続紀宣命五八の例は打消の当然、断定であり、(A)に対応する。「忘得」なる陳述をうべなひ得ない状態にあるわけである。次に他の十五例を挙げる。個々の場合に用法を細別するのは適当でないことが多いので細説はしないが、(A)の三類の用法に応ずることは明白である。根本概念に由来する自然な分化で

ある。マシジは上代文献に少数現れるに過ぎないので、(B)(C)に対応する派生的用法が見えなくても何ら差支へない。

仁徳紀「予屢麻志枳」斉明紀「倭須羅奴麻旨珥」万葉巻廿・四四八二「和須良由麻之目」同巻二・九四「有勝麻之目」同巻四・六一〇「有不勝目」同巻四・七二三「有勝益士」同巻七・一三五二「依勝益士」同巻十一・二七〇二「在勝申自」同巻十四・三三五三「由吉可都麻思目」同巻七・一三八五「不可顕」続紀宣命二六「敢末之時止為与」同三〇「得麻之字岐」同二四「不言伎」「不為伎」同一四「不改自伎」

可能の意味を表す言葉にマシジが伴ふ例の多いことは注意すべきである。中古以降にェ…マジの形が屢々現れることに対応し、マシジがマジの古形なる事を示す一証となる。アリカツマシジを堪ヘラレナイダラウと訳すのは不正確である。ドウシテモ我慢出来ナイ、ドウシテモ堪ヘラレサウニナイといふ程の力を持つもので、マシジの簡潔な表現力を現代語に移すことは困難でも、ジ・ザラム等と混同すべきではない。従って万葉九四・六一〇・二七〇二の歌は仮定条件によむ必要はないわけである。

四　マジの意義用法

再びA(四五一ページ)を引用。「まじ」は否定的に推量す。其の意義はいづくまでも、現にしかあるまじと否説するものにして、すべて「べし」の反対なりと見ゆ。この故に推理的に又前後の関係によりて、当然又は必然のものとして推定するものなり。即或事実状態を非存在的に推定するなり。

推理的否定と改むべきであるが、果してベシの否定語なるか確める必要がある。以下、ベシの三類の用法に対応することを用例により示さう。

(A)　打消の当然・必然・断定・推定、及び不可能を表す

○打消の当然・必然。源氏物語桐壺「あるまじき恥もこそ」と「人の胸あくまじき人の御覚えかな」「長かるまじきなりけりと」「あまたさるまじき人の恨を負ひし」「また世の承引くまじきこと」(此は断定、強い推定とも見得る)

○打消の断定・推定。竹取物語「こゝにおはするかくや姫は重き病をし給へば(え出で)おはしますまじ」「まからむ道も安くあるまじきに」土佐日記「かの国の人きゝしるまじくおぼえたれど」(これらは当然・必然とも見得る)

○不可能(打消の当然・必然に含み得る)。竹取物語「居る人だにたはやすく見るまじきものを」「たはやすく人寄り来まじき家」

ェ…マジが不可能の断定、推定には多く用ゐられる。

(B)　禁止を表す(転義)

ナを用ゐる形が一般に使はれるので例は少い。源氏物語若菜下「あるまじくつらき御事なり」(間接的)、同夕霧「いとあるまじきことなり」(間接的)、同行幸「人にも漏らさせ給ふまじ」(直接的)

(C)　打消の決意を表す(転義)

古くはジが用ゐられるので用例は少い。ジよりも強く、なすまじき事と決意するのである(マイより強い)。

源氏物語藤袴「人に聞かすまじ」同若菜下「罪重き心も更に侍るまじ」同椎本「更に思う給へ怠るまじくなむ」

以上で、マジがベシの否定語、即ち推理的否定の助動詞なるこ

とを示し得たと思ふ。天徳歌合の判詞「ことによせぬはあるまじ。いはれなし。」は、マジが陳述に根拠なきこと、いはれなきことを表すに用ゐられる事を明示する。なほマジを推量と解する事の不可なる例を挙げる。教長の古今和歌集註に、巻十二最終歌の「ヲシカラナクニ」を「ヲシカルマジ」と註してゐる。枕草子・なほ世にめでたきもの「……日ひと日見るとも飽くまじきを、はてぬるこそいと口惜しけれど、又あるべしと思ふは頼もしきに……この度は又もあるまじければにや、いみじくこそはてなんことは口惜しけれ」に於て、祭の式事の慣例として又あるかないかは定ってゐるので、「又もあるべし」「又もあるまじければにや」といったのである。ベシにマジが対応することを示す好例でもある。

歌に用例が少いのは事実である。新古今集までの勅撰集では、後拾遺集に一例(Cが例無しとしたのは誤)、金葉集に二例、詞花・千載・新古今の諸集に各一例を見る。これらの例によってもマジを否定推量とする事の非なるを知る。殊に詞花集巻十「この世には又も見るまじ」は死に近い者の言葉、千載集巻九「この世にてまたあふまじき悲しさに」は死者の追憶なる事から、推量とする事の不可なるを知る。後拾遺巻十六「歎かじなつひにすまじき別れかは」は反語で必然の事実と断定したものである。金葉集巻一「えこそ帰るまじけれ」同巻九「えぞ住むまじき」は共にエ…マジの形である。新古今集巻十三「忘らるまじき」はその唯一例。

以上でマジがベシの否定語なる事を示し、マジはマジの古形なりとの説を裏書し得たと思ふ。なほベシの否定には外に三種類ある。…ズアルベシ・…ナカルベシ等の動詞否定形(助動詞の前が否定形、用例少し)、ベクアラズ・ベクモアラズ・ベキニアラズ等の助動詞否定形(助動詞の後が否定形)、ベシヤ・ヤ…スベキ・ベカランヤ等の反語形の三種である。次にベカラズに就て述べる。

五　ベカラズは元来訓点語なる事

ベシの自然な否定形と思はれるベカラズが、純国語でなく、訓点語として発生したものである事を証するには、純国文にはこれが現れず、訓読調の著しい文には少くない事を示せば充分であらう。其には院政期までの記録の検討で足りる。訓読調の著しい作にはベカラズが珍しくないことは容易に知り得るので、然らざるものにより、ベカラズがいかなる文に現れるかを精査し、訓読調の可能性の大なるものゝみなる事を肯定し得るならば、訓点語として発生した事を証し得よう。

上代でベカラズの確実な例は仏足石歌に一例あるのみである。神武記「不宜」顕宗記「不可」(二例)をベカラズと訓む古事記伝等の説は根拠のあるものではない。既出の万葉、続紀の例も然りである。仏足石歌は仏典の飜訳調著しく数個の飜訳語を見る程なので、「於豆閇可良受夜」の唯一例のみによっては、ベカラズの自然発生説を支持し得ない。例へば、「彌蘇知阿麻利布多都乃加多知」「夜蘇久佐」「志爾乃於保岐美」は、それぞれ三十二相・八十種好・死王に由来する。特に、死ニノオホキミには特殊の造語法が用ゐられてゐる。「死ニ」と後続の名詞を結びつける為に「ノ」が使はれる例は古来他にないと思はれるが、王をオホキミと訳した為に、死ニキミとは異る造語法を用ゐたのであらう。よってオヅベカラズヤは飜訳調の可能性があるので、後世の資料に拠らねばならない。これが自然発生語ならば、和文に相等豊富に

現れるはずである。

平安院政期所属の作は一往通説に従ふ。万葉仮名を用ゐる資料にはベカラズの確実な例がないので他の資料による。三宝絵詞・今昔物語等の訓読調の著しい作にベカラズが現れるのは既述の如くである。大鏡等の歴史物や和歌の評釈等、男子が学者、批評家として著したものは、訓読調の影響を受けるので省く（現存の教長古今和歌集註には見ない）。

和歌と其の詞書・左註等に、ベシは多数現れるが、ベカラズは全く現れない。古今集仮名序は漢文修辞法をうけ純国語的でない語法を見るが、未だベカラズは見ない。アルハ…アルハ…、ソノ名キコエタル人ハ即チ、カツハ…カツハ…、タトヒ等は純国語風ではない。(3) 新古今集序は更に訓読調著しく、歌集序に始めてのベカラズを二つ記録する。

ベカラズを見ない物語・日記類は、伊勢・大和・狭衣・堤中納言・とりかへばや・寝覚物語・土佐・蜻蛉・高光・和泉式部・紫式部・更級日記・枕草子である。

竹取に一つ見える。然し外にイハンヤ・アルハ…アルハ…等の訓点語が見えるので反証とはなり難い。宇津保は部分的にもせよ訓読調の著しい作で、ベカラズが六例見えるのも怪しむに足らない。落窪もイハンヤ等の訓点語を含むので、ベカラズが四例見えても不思議ではない。以上従来も男性の作といはれたもので、訓点文の影響を受けるのは自然である。

源氏物語に約三千四百のベシと約六百のマジを見るが、ベカラズは唯一例、手習の僧都の言葉として「惜しまずはあるべからず」に見るのみである。儒者・仏徒が訓読調の言葉を語るのは既に指摘された所であるが、これはその一例である。ズハアルベカラズのみでなく、ベカラズそのものが訓点語と見るべきものである。岡本保孝の博士読考証は純国語としてこのアルベカラズを引用するのは誤である。

栄華物語正篇は語彙的にも巻々特徴のあるものであるが、種々の人の文が混ってゐる事をいふに止める。僧尼の文を採ったのは玉の台のみではない。音楽に「これは物も覚えぬ尼君たちの思ひ思ひにかゝすれば」とあるのも注意すべきである。この文の前は訓読調著しく、その中にベカラズを一つ見る。初花「子のかなしさを知ろしめすべからず」は、同巻「…もはら死なぬわざなり。いはんや…」の如く、(4) 男性の言葉が訓読調を帯びる例があるので、これもその一例と思ふ。本の雫「空しかるべからず」は純訓読調の願文に見る。御裳著「云ひつくすべからず」の少し後にイハンヤを見る。以上四箇が全例で、続篇には見ない。

浜松中納言物語に唯一例として、巻一「これはこの世の人にてあるべからず」に見るが、夢の告に訓読調が用ゐられたと見得る。

枕草子に於て、「先づ院の御迎に」に始まる節に「これは比ぶべからざりけり」と記す写本類は多いが、前田本（尊経閣叢書丁卯刊行書・三一七頁）に「これはまたにるべくもなかりけり」とあるので、例とはなし得ない。他にベカラズを見ないので、結局皆無といふ事になる。

讃岐典侍日記下に「たつべからず」「もどくべからず」を見るが、前のは男性の言葉、後のは地の文である。先に栄華物語に男性の言として一例を挙げたが、道長時代に男性の宮廷人が果して日常生活にベカラズを用ゐたかの疑問が生ずる。他の作品によればこの頃までは普通に用ゐられなかったかと思はれるので、後人

の加筆に係るとの疑が起る。落窪の四例の内三例は男の言葉、一例は地の文に見るが、これにも同様の疑がかけられるわけである。竹取・宇津保に関しても同様である。これらの問題に関しては資料不足の為明言し難い。院政期には訓読調が宮廷人にもある程度採入れられ始めたと見られるふしがあるので、男性の言葉としては勿論、女性の文章語としても使はれた可能性はあるわけである。故に上述の二例は原文にあったかも知れない。

後世の作も一言する。とりかへばや物語の現存せるものは後世の改作であらうが一往挙げておいた。無名草子にもベカラズを見ない。阿仏尼の十六夜日記には見ず、夜の鶴に二例（一例は男の言葉の引用とも見られる）見る。内容等にも関係するが、前者が擬古体、後者が当時の書簡体なる事は興味がある。平家物語妓王の段には、女性の言も一部訓読調を示すが、仏御前の言葉も一部訓読調で、その箇所にベカラズを一例見る。

以上でベカラズの用例の偏在は疑ふべくもない。これが純国文風の文章に現れない事は実証されたと思ふ。純国文にベシは多数現れ、ベカラム・ベクモアラズ等も少くないにも拘らず、ベカラズ・ベクアラズが全く現れないのは、その特殊性を示すものである。歌に殆ど現れないマジと異り、散文にも全く見えないのは、ベカラズ（ベクアラズ）が純国語として自然発生したのでなく、不可などの訳語として生じたからである。(5) 訓点語としての異質性が自由な使用を妨げたのである。

仏足石歌のベカラズは奈良朝に於る訓点語の存在を示す貴重な例といふべきである。古事記・宣命・万葉、其に恐らくは書紀に於ても、ベカラズと訓むのは誤である。

六　マシジの語原

ベカラズ（ベクアラズ）が訓点語なる事は実証し得たが、自然発生しなかった理由を説明する必要がある。ク活用の語の例として、ベシの否定語はベクアラズ・ベカラズが自然な形と思はれるにも拘らず、自然発生しなかったのは、ベクモアラズ・ベカラム等の存在と思ひ合せて、奇異の感に打たれざるを得ない。この不思議は、マシジ（マジ）がベシの否定形であった事を知る事により解消する。

マシジの如き概念を表す語が一次的に発生する可能性は極めて少い。ベシの如き概念を表す語は当然一次的に発生するが（勿論転義による事もある）その否定語は肯定語の否定形として生ずるのが一般である。マシジは三音節語なので合成語と見て、マシ＋ジとする説があるが、既述の理由からも不当であるし、推理的否定の意味も生じ難い。又マシジが一般に用言の終止形に接続する事とも矛盾する。

形容詞風の語の否定形はヨカラズ（ヨカラズ）等の如くアリを介する形が普通であるが、原始的には否定辞を直結する形があったに違ひない。確実な例としてホシジ・カシコジを挙げ得る。又時ジ・鴨ジ・男ジ・我ジ等も、体言としてでなく、形状言的に使用した名詞又は代名詞の否定形と見るべきものである。一般に否定は断定の形をしてゐても次の四種の用法をもつ。(一a)単純否定、(一b)一部肯定の否定、(一c)強調否定、(二)部分否定。例へば、「男ならず」といふ否定句に就て番号順に説明する。女に就て、(一a)男でないと単純に否定、(一b)男ではないが男の

様だと一部肯定、(一c)確かに男でないと強調否定、(二)男に就て、男らしくないと否定、或は性別不明の場合、部分的、表面的に男でないと否定。カシコジ・時ジ・鴨ジ・我ジの用例は(一b)に当り、男ジは(二)に当り、ホシジは不明である。続紀宣命六・一四のカシコジモノはカシコキ身ニアラズと自己の無資格を卑下する言である。カシコは畏怖・畏敬の対象を形容し、かしこまる様を形容する語ではない。マシジのジが上述のジと同じい事は殆ど自明であらう。依ってマシジのマシとベシの対応が残された問題である。其にはウベの古形がウマなる事を示し得ればよい。ウベはウマ（甘・可美）と同根なる事を次に述べる。

両語は一見無関係に見えるが、緊密な関係を見出し得る。ウベは推理的肯定語であり、ウマは価値的肯定語である。ウベは推理的肯定とはいっても、原始的には、或る陳述・事実に対する満足感に基く価値的肯定に由来したと考えられる。漢語の宜がウベ・ベシ・ヨロシ等と訓ぜられ、可が、説文等に基き、B. Karlgren 氏等が説く如く、元来 approving exclamation であり、(6)ヨシ・ベシ等と訓ぜられる事を考へ合せれば、其の間の事情は明白とならう。即ち両語は元来満足を表す価値肯定語である。音韻的にも、ア列音は乙類エ列音と通じ易く、マ行・バ行音は通じ易いので、ウマとウベ乙の相通は肯ひ得る。次に分化の過程を少し詳しく述べる。

価値肯定語として、最初ウマ・ウメ乙の doublets があり、それらに対しマシ・メ乙シの両形があったと思はれる。その否定形にはマシジ・メ乙シジの両形があったかといふと、これは疑はしい。上代に於て乙類エ列音は後続音節との緊密な結合を忌避する傾向が著しいので、(7)恐らくメ乙シジの形はなかったと思はれる(メ乙シジに於るメ乙とシはメ乙シに於るよりも結合が自然緊密になる)。従ってマシ・メ乙シ・マシジの三形が存在した時代があったであらう。意味の分化が進むにつれ、ウマは甘・可美の意味のみに、ウメ乙はウベ乙の意味のみに使はれる様になり、ウマとの関係が明かに意識されてゐたマシは亡び、メ乙シとマシジが並立する様になったであらう。次でウメ乙からウベ乙の形が生じ、これに伴ひベ乙シの形が生じたが、遂にウメ乙とメ乙シが相伴って亡び、ベシとマシジが残ったと思はれる。ベ乙シとウベ乙との関係は上代でもかなり意識されてゐたと思ふ。…為スベ乙といふ表現も残ってゐたのではなからうか。少くとも…ベラナリは…ベより直接生じたに違ひない。結局、マシジは、ウベとの関係意識年と共に薄れて、古形のまゝ残り、ベシとウベは相伴って古形より転成して来たわけである。

以上でマシジがベシの否定形なる事を説明し得たと思ふ。ジが部分否定(二)に用ゐられる場合、マシジの推定的用法が生ずる。形容詞的用法の場合は、部分否定的にかなり成り易い。ベカラズは一般に推定的用法はない。アラジ・行カジ等のジも同様に説明し得る。(8)

七　後世に於る該助動詞等の消長

鎌倉期以後の文語に於て、ベシ・マジの用法は中古と大差ない。訓読文の影響は益々著しいので、ベカラズは盛に用ゐられ、何時しか純国語と感ぜられる様になった。民衆の日常語に於る該助動詞等の消長は、資料不足の為明言し難い事が多い。室町末期

の資料はかなり豊富でも、其以前の資料はなきに等しい。抄物は勿論民衆語に基くものではない。平家物語・謡曲の詞の文は蓋し武士階級の言葉に基く。これらに於るベシ・マジ・ジ等の用法は古典語と大差ない。

天草本平家物語に比べ、室町末期の中央の民衆語に近いと思はれる天草本伊曾保物語を検討する。已に抄物でも化石化してゐたジは慣用語法ヨモ…ジ（よも思ひ忘れじ）に見るのみであるが、狂言によれば、これとても日常語であったか疑はしい。マジイ・マイの両形を見るが、古典期のマジの用法に近い。唯、決意・推定の力が弱まりジに等しいと見得る場合がある。これが遂にジを廃語にした原因である。然し、狼と豚の事「あるまじい」蟬と蟻との事「叶ふまい」等の如く明かに断定と見得る場合がある。金句集や狂言に見ないマジイは寧ろ文章語とすべきだらう。江戸時代の文献にも当為を表すベキを散見するが、詞の文が地の文に影響されたと見得る。武士言葉としては、…ベキ・…ベク存ジマスル等の言ひ方は使はれたかと思ふ。蝮蛇と小刀の事「打たうずる枕」バストルの事「親しまうずる」「加へうずる」獅子と狐の事「あらうずる」等、…ウズルが或る程度ベシの代用をしてゐる。

狂言でもマイ・ウズルの用法は同じい。狂言記、生捕鈴木「消えべく」「すべからず」栗田口「古かるべい」「あるべし」、狂言記外篇、魚説法「あるべからず」女山賊「取るべし」福の神「たつべからず」「いとふまじ」等は皆民衆の日常語ではない。所謂奴言葉や関東弁にベイは残ったが、ベカラズ或は其に由来する語が日常語に使はれた跡はない。

現代語のマイはジの代用語に過ぎない。現代のベキ・ベクは元来文語的であり、マジキ・マジクは更に文語的であり、ベシ・ベケレ・マジ・マジケレは純粋の文語である。又…スベク余リニ難シイ等の語法が洋語の飜訳より生じた。

以上、甚だ簡略ながら、ベシの否定形マジジがベカラズの自然発生を妨げた所以を説明した。識者の御批正を仰ぐを得ば幸である。

註(1) ベクアラズ等の如くアリの融合しない形は和文には見ない。点本に於ても、平安極初期にベクアラヌの例は見えるが、其の他の形は管見に入らない。和文ではベカラヌ（ネ）の形は見えない。ベカラザリ（ル・レ）の形はあるので、ベカラズにこれらの形も代表させる。ベカラヌ（ネ）を見ない事もこの語法の特異性を暗示する。

(2) 万葉巻十、二三一七「殊落者袖副沾而可通将落雪」（将落はフリナムに非ず）に於る如く、ベクは主体の状態動作が起す必然の結果、或はかゝる結果を期待する主体の目的を表すことがある。

断定又は推定のベシは事実の真否の判断に使はれる。断定辞のナリに結びつくベシが断定、推定を表すのは当然である。主語の動作・状態がその意志に無関係の場合、ベシが断定・推定を表すのは自然である。

(3) 新撰字鏡「儻 設也若也豈也倘也太止比又介太志」タトヒを仮定に使ふのは訓読語法であるが、儻を若・蓋等から区別する為に用ゐられた訓み方から発生したかと思ふ。

(4) モハラは純国語であらうが、当時は古語となり、訓読調の場合にのみ現れる。

(5) 歌に自由に使はれなくても平安期の新語とはいへぬ事がある。ウツクシ・ウルハシはともかく、上代と意義用法を殆ど異にするとは思へぬオモシロ（シ）が、極少数現れるに過ぎないのは、俗語と感ぜられたのであらう。

(6) 可に当為・必然の意味はない。mortal を可死的と訳すのは誤。可愛（アイスベシ）・可恐（カシコマルベシ）等は直訳語。

(7) 音声の研究（第八輯）掲載予定の拙稿に略述。

(8) 補訂前の拙稿に於ても同じ趣旨を述べておいたが、橋本四郎氏の「上代の形容詞語尾ジについて」（万葉十五、一九五五年四月）と浜田敦氏の「助動詞」（万葉集大成（六）言語篇一九五五年五月）にジについて同様の説が述べられてゐるので、かなり書改めた。橋本氏はカシコジの説明に窮し、浜田氏は新撰字鏡「不意見（獲万久保志自）」を挙げてをられる。両氏ともマシジに就ては私見と異る。なほ肯定にも四種の用法があり、ジにシが対応する事を附言しておく。

一九五三・一〇・八稿、一九五四・一二・九改稿、一九五六・一・二九補訂